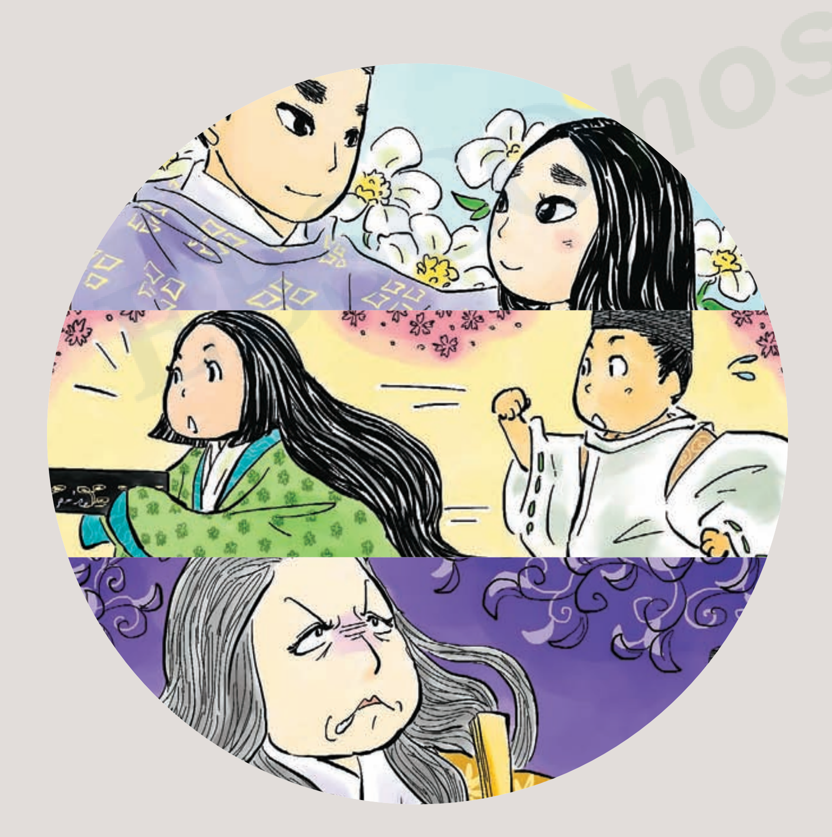
にほんご多読(たどく)ブックス

# おちくぼ物語(ものがたり)

NPO多言語多読［監修］

Taishukan Japanese Readers
Level 4



TAISHUKAN

## 〈にほんご多読ブックス〉の読み方

辞書を使わないで、すらすら読めるレベルの本を楽しくたくさん読むこと、これが「多読」です。多読は日本語の勉強にとても大切です。「にほんご多読ブックス」には、昔話や小説、伝記、ノンフィクションなどいろいろな話が入っています。次のルールを守って楽しみながらどんどん読みましょう。

### ●多読のための４つのルール

**1** やさしいレベルから読む

**2** 辞書を引かないで読む

**3** わからないところは、とばして読む

**4** 進まなくなったら、他の本を読む

にほんご多読ブックス
Taishukan Japanese Readers

Level
4

# おちくぼ物語

原作者不明（原題『落窪物語』）
浦川やす子［簡約］
NPO多言語多読［監修］
大島史子［挿絵］

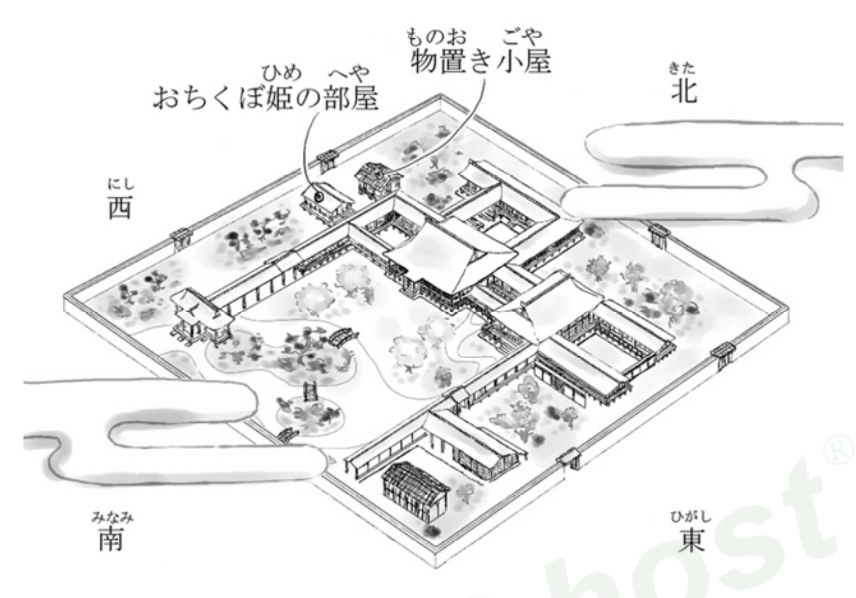
大修館書店


EBSCOhost®



これは、有名な『源氏物語』と同じ平安時代（七九四〜一一九二年）の物語です。『源氏物語』より古い作品だと言われていますが、作者はわかっていません。

この時代の貴族の結婚は、今の結婚とはずいぶん違っていました。結婚相手を自分で決めることはありません。親が決めます。そして、何回か手紙を送り合った後、男が女に会いに行きます。男が三日間女の家へ通うと結婚したことになり、親や親戚と結婚のお祝いをします。結婚しても、子どもができても、若いときは男が妻の家へ通います。夜遅く行き、朝早く帰ります。また、貴




族の男は妻を何人も持つことができました。そして、男が偉くなると自分の家を持ち、一人の妻を選んで子どもと一緒に住むようになります。その選ばれた妻のことを「北の方」と呼びます。この『おちくぼ物語』は、そんな時代の恋の物語です。若い貴族の女の子たちは、この話が大好きだったようです。

## 一

ここは、京都にある源忠頼の広い家だ。忠頼と北の方、結婚した二人の娘、まだ結婚していない三番目と四番目の二人の娘、そして三番目の息子も一緒に住んでいる。

この家の狭い部屋で、一人の美しい娘が、一生懸命、着物を縫っている。娘の父親は忠頼だが、母親は北の方ではない。娘の母親は、天皇の親戚だったが、娘が七歳のときに亡くなった。母親が亡くなった後も五、六年、娘は母親の家で暮らしていたが、その後、忠頼の家に住むようになった。北の方は、自分の子どもではないこの美しい娘が好きになれず、狭くておちくぼんだ部屋を与えた。おちくぼんだ部屋というのは、他の部屋より低いところにある部屋という意味だ。北の方は、このおちくぼんだ部屋にいる娘を、「おちくぼ」と呼んだ。おちくぼ姫の部屋には、他の娘たちの部屋にあるようなきれいなものは何もない。また、美しい着物を縫っているおちくぼ姫の着物は、古くてボロボロだ。

北の方は、いつも、家族の着物をおちくぼ姫に縫わせた。おちくぼ姫は夜も寝ないで縫い続ける。それでも着物ができるのが遅いと、

「まだ、できないの？　遅いわね、早く縫いなさい！」

と、北の方に怒られた。おちくぼ姫は、死んだ母親を思いながら涙を流した。



――お母様、私は恋もしないで、死ぬまで縫い物をしているのでしょうか。寝ないで縫い続けても、怒られます。私もお母様のところへ早く行きたい――

こんなかわいそうなおちくぼ姫の楽しみは、琴を弾くことと、侍女の阿漕と話をすることだ。阿漕と姫は、子どものときから姉妹のように仲よく暮らしてきた。忠頼の家に住むようになってからも、阿漕が姫の世話をしている。

ところが、三番目の娘、三の姫が、阿漕に世話をしてもらいたいと北の方に頼んだので、阿漕は三の姫の世話をすることになった。阿漕は、おちくぼ姫に泣きながら言った。

「姫さまのお世話をするために、ここに来ましたのに…。三の姫の世話はしたくありま

ん」

すると、姫は言った。

「そんなことを言ってはいけません。同じ家にいられるだけで、私はうれしいですよ」

## 二

三の姫が結婚した。相手は蔵人という立派な貴族だ。その蔵人の家来、帯刀は、蔵人が三の姫のところへ来るとき、いつも一緒に来る。そして、三の姫の世話をしているかわいい阿漕に恋をした。しばらくして二人は結婚した。帯刀は毎晩、妻の阿漕のところへ通ってくる。

ある日、阿漕は帯刀に、おちくぼ姫のことを話した。

「北の方が、姫さまをひどくいじめるのです。それでも、やさしい姫さまは怒らないで一人で泣いています。立派なやさしい男性が姫さまと結婚して、ここから連れ出してくれないでしょうか」

何回も何回も、阿漕は帯刀におちくぼ姫の話をした。この時代、貴族の娘は、家族以外の男には顔を見せない。だから、帯刀も、もちろん、おちくぼ姫を見たことはない。けれど、阿漕からおちくぼ姫のことを聞いて、何とか助けたいと思うようになった。そこで、子どものときから兄弟のように仲の良い道頼に話してみることにした。道頼は立派な貴族で、その上、背が高く、ハンサムで、性格も明るい。あちこちの立派な貴族の娘との結婚話がたくさん来る。でも、道頼は、いつか親が決めた結婚をするのだから、今はたくさんの女性と恋がしたいと思っていて、結婚はしていない。帯刀が、

「道頼さまは、どうだろう？」

と話すと、阿漕は言った。

「道頼さまが、本当に私の姫さま一人だけを愛してくださるならいいけど、そうじゃないならだめよ」

「道頼さまが姫さま一人だけを愛してくださるかどうか、それは、わからないよ。でも、明日、話してみよう」

次の日、帯刀は道頼におちくぼ姫のことを話した。道頼は、

「ああ、なんてかわいそうな姫だろう。私を姫に会わせてくれ」

と言って、帯刀に手紙を渡した。この時代の恋の始まりは、手紙だ。まず男が女に手紙を書く。

阿漕から道頼の手紙を受け取ったおちくぼ姫は、私のような娘が幸せになれるはずがないと思って、手紙を読もうとしなかった。

道頼は、おちくぼ姫に何回も手紙を書いたが、姫からは一度も返事がなかった。それでも道頼の会いたいという気持ちは変わらない。それで手紙を書き続けた。

> ああ、まだ会ったこともないあなたに、恋をしました。
> こんな気持ちは、初めてです。どうぞ、お返事をください。

いくら待っても返事は来ない。道頼は、姫になかなか会うことができなかった。

## 三

長い間待っていた機会が、とうとう来た。忠頼が家族や侍女たちを連れて、石山寺に出かけることになったのだ。京都から石山寺までは、二、三日かかる。途中、美しい景色を眺めながら、みんなでお弁当を食べるのは、とても楽しい。女性たちは、このような旅行をとても楽しみにしている。しかし、北の方は、おちくぼ姫を連れていかない。おちくぼ姫が行かないなら、阿漕も行きたくない。阿漕は、急な病気だと言って、姫と一緒に家に残った。帯刀はそれを知って、今夜こそ、おちくぼ姫のところへ行く良い機会だと、道頼に伝えた。

みんなが出かけた後、静かになった家の中で、姫と阿漕は、久しぶりにゆっくり話をすることができた。

そこへ、帯刀が道頼を連れてきた。おちくぼ姫の部屋からは、阿漕と姫が、仲良く楽しそうに話している声が聞こえる。道頼が戸を少し開けると、暗い部屋の中に二人がぼんやりと見えた。

――下を向いているほうが姫だろうか。顔は見えないが長い髪がとても美しい――

道頼がこう思いながら見ていると、姫が阿漕に言った。

「阿漕、お客さまが来ているようだから、早く部屋に戻りなさい」

「いいえ、私はここにおります。今日は誰もいないから特に寂しいでしょう」

「いいえ、寂しいことには、もう慣れています。私は大丈夫ですよ」

阿漕は部屋に戻った。一人になったおちくぼ姫は、静かに琴を弾き始めた。

琴を弾いていると、悲しくなり、

「ああ、本当に悲しくて苦しい。私は石になりたい。石は悲しんだり苦しんだりしない

から」
と、小さな声で言った。それを聞いて、道頼は、おちくぼ姫がかわいそうでたまらなくなって、とうとう部屋に入っていった。
「あっ、どなた?」
「大丈夫、驚かないで。私は道頼です。やっとお会いできました」
と静かに言いながら、道頼は姫をやさしく抱いた。おちくぼ姫は、古くてボロボロの着物を着た自分が、とても恥ずかしくて、どこかへ消えてしまいたいと思った。それで、姫は黙って泣くばかりだった。道頼は、何も言わずに姫をずっと抱いていた。
朝になった。道頼はやさしく言った。



「もう帰らなければなりません。時々は、お返事をくださいね」
「こんなボロボロの着物を着ている私を見られて、恥ずかしくてたまりません」
おちくぼ姫はまた泣いた。



――なんてかわいいのだろう。今まで恋をしたどんな女性より、この姫が好きだ――
道頼は、姫に自分の着物を一枚やさしく掛けて帰っていった。

すぐに道頼から手紙が来た。この時代、男は帰るとすぐに女に手紙を送る。阿漕は、おちくぼ姫に道頼の手紙を渡したが、姫は読もうとしない。阿漕が手紙を見せた。

**昨日の夜、あなたと一緒にいて、お会いする前より、もっとあなたのことが好きになりました。またすぐに、お会いしたいです。**

阿漕は返事を書くように言ったが、姫は気分が悪いと言って書こうとしない。

おちくぼ姫から返事がないが、道頼は思った。

——昨日の夜のことを怒っているのではないだろう。私はこんなに姫を愛しているのだから、姫も私のことが嫌いなはずはない——

阿漕は、二人の結婚を心から願っていた。そこで、金持ちの親戚に頼んで、いろいろな物を借りて、部屋をきれいに飾った。また、姫の髪をきれいにして、自分が持っている一番きれいな着物を着せた。姫は、やっと泣きやんだ。





夜になって、道頼が来た。昨日の夜と違ってきれいに飾られた部屋で、美しい着物を着たおちくぼ姫は、とても明るく、うれしそうにいろいろ話をした。

朝が来た。道頼が帰るとき、おちくぼ姫を見ると、姫の顔は、朝の光の中、桜の花のように、とても美しい。道頼は、この姫をきっと幸せにしようと、心から思うのだった。

## 四

今夜は、大切な三日目の夜。結婚式の日だ。この日、二人は特別な餅を食べる。それを三日夜の餅という。阿漕もおちくぼ姫も道頼を待った。

ところが、夜になって雨が降ってきた。雨は、だんだん強くなり、とても激しくなった。

道頼から手紙が届いた。

> あなたのところへ行くつもりでした。でも、雨がどんどんひどくなってきて、行くことができなくなりました。私の気持ちは変わりません。私の愛がなくなったなんて思わないでくださいね。

すると、姫からは、

> こんな雨の中では、いらっしゃらないと思っていました。
> でもあなたに会えないと思うと、悲しくて、私の心は雨に濡れたように涙で濡れ始めています。

と返事があった。道頼はこの手紙を読むと、会いたくてたまらなくなり、すぐ激しい雨の中、姫のところへ向かった。

雨でぐっしょり濡れた道頼が来た。道頼は、やさしく姫を抱いた。すると、姫の着物の袖が、涙でぐっしょり濡れている。

「私に会いたくて、こんなに泣いてくださったのですね。私も雨でぐっしょり濡れている。あなたに会いたくて、こんなひどい雨なのに会いに来たのですよ。あなたを深く、強く愛しているから来たのですよ。私の気持ちをわかってください」

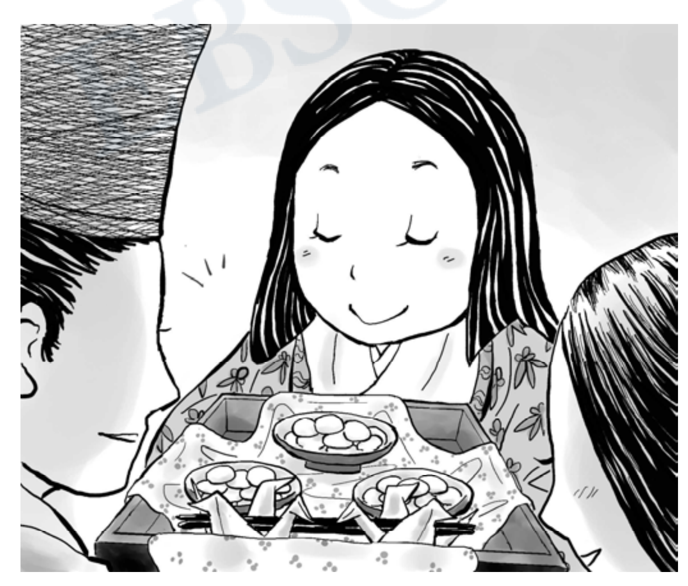
そこへ、阿漕が、餅を持って入ってきた。

「これは、三日夜の餅です。道頼さまは、これを三つ食べてください。姫さまはいくつでもどうぞ」

道頼も初めてのことで、三つも食べるのかと驚いたが、二人で幸せそうに餅を食べた。

「ご結婚、おめでとうございます！」

阿漕は、二人の結婚を祝った。阿漕は自分の部屋に戻り、道頼とおちくぼ姫は、二人だけで楽しく過ごした。



朝になって、外が急ににぎやかになった。石山寺から、みんなが思ったより早く帰ってきたのだ。道頼は、部屋から出られなくなった。

「おちくぼ！　戸を開けなさい」

北の方の声がする。阿漕が困っていると、道頼は言った。

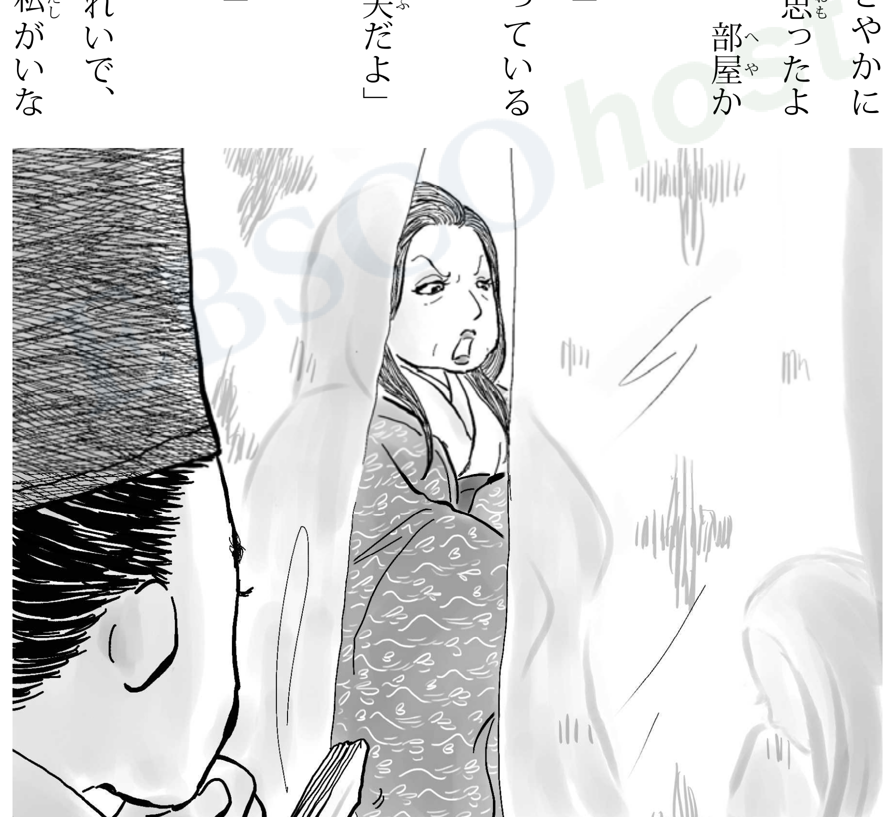
「私はここに隠れるから大丈夫だよ」

阿漕は戸を開けた。北の方は、

「なぜ、すぐ開けなかったの！」

と怒りながら部屋へ入ってきた。

「どうして、こんなに部屋がきれいで、美しい着物を着ているの？　私がいな



い間に、何かあったのですか！」
おちくぼ姫は恥ずかしそうに、
「いいえ」
と、小さな声で答えた。道頼は、北の方を見て、きれいだけれど、嫌な顔だなと思った。

次の日の朝早く、道頼は誰にも見られないように帰っていった。
姫は阿漕に言った。
「本当にいろいろありがとう。うれしかったわ」
阿漕は、道頼の気持ちが、いつまでも変わらないようにと心から思うのだった。

## 五

ある日、道頼は大切な用事があって、おちくぼ姫のところに行くことができなかった。
そこで姫に手紙を書いて、帯刀に渡した。

昨日の夜は大切な用事があって、あなたのところへ行けませんでした。一晩会わなかっただけなのに、とても悲しい思いでいっぱいです。それに今のあなたの暮らしを考えると、もっと悲しくなります。いつか、きっと、私があなたをどこかへ連れ出してあげます。

姫は返事を書いて、阿漕に渡した。

私もあなたがいらっしゃらないので、とても寂しいです。私をどこかへ連れ出してくださるという、あなたのやさしさがうれしいです。あなたを信じています。

ところが、阿漕から姫の手紙を受け取った帯刀が、その手紙を落としてしまった。帯刀が、落とした手紙を探していると、蔵人が笑いながら聞いた。

「どうしたのだ？　何か探しているのか」

帯刀は言った。

「蔵人さま、もし拾われたのなら、お返しください。お願いします」

「何のことだ？　私は知らないよ」

蔵人は、そう言いながら部屋を出ていった。しかし、やはり蔵人は手紙を拾っていたのだ。

蔵人は手紙を三の姫に渡し、三の姫は北の方に見せた。

北の方は思った。

——やはり恋人ができたんだわ。でも、今、私が騒ぐと、恋人が急いでおちくぼを連れていってしまうかもしれない。縫物をする者がいなくなったら大変だ。しばらく騒がないでいよう——

六

夜になって、何も知らない道頼が来た。道頼は、

「なぜ返事をくださらなかったのですか」

と聞いた。姫は帯刀が手紙を落としたとは言えず、

「北の方が、私の部屋にいらっしゃったので」

と嘘をついた。道頼が言った。

「私は、早くあなたをここから連れ出したい。どこへでも来てくれますか」

「はい、どこへでも。道頼さまの言うとおりにします」

その後、二人は楽しく過ごした。

朝になった。バタバタと大きい足音が聞こえたので、道頼は急いで隠れた。北の方がおちくぼ姫の部屋に来たのだ。

「おちくぼ！　もうすぐ大きな祭りがあります。私たちが祭りに着る着物を縫いなさい」

阿漕が答えた。

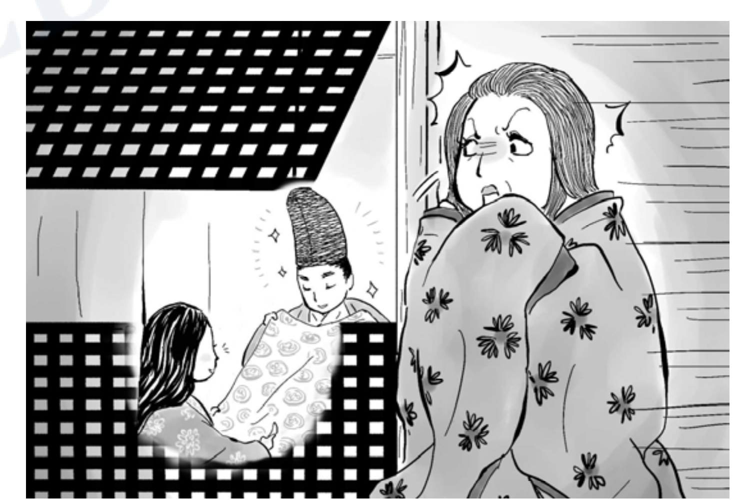
「姫さまはまだ寝ていますから、起きたら伝えます」

北の方は怒って言った。

「何！　寝ている？　おちくぼ、起きなさい！　着物を縫うのは、あなたの仕事でしょう。

この頃、きれいな着物を着たりして、ちっとも仕事をしませんね。仕事をしないなら、すぐここから出ていきなさい」
そして、部屋を出ていこうとしたとき、隠れている道頼の着物が見えた。
「あら、この着物は、どなたの？」
阿漕がびっくりして答えた。
「知っている人から頼まれた着物です」
「まあ！　他の人の着物を縫って、私たちの着物は縫わないんですか！」
北の方は、怒って行ってしまった。けれど、このとき北の方は、
――あの着物は、きっと、おちくぼの恋人のものだ――
と気づいていたのだ。
夜、北の方がおちくぼ姫の様子を見に来た。すると、そこには、縫物をしている姫の隣で楽しそうに手伝っている道頼がいた。北の方は驚いた。三の姫の夫の蔵人より、ずっと立派だ。

――美しい男だ。着ている着物もすばらしい。
誰だろう――
そう考えながら立っていると、道頼と姫が話しているのが聞こえた。
「私は疲れました。縫うのはもう止めて、休みませんか」
「いいえ。早く縫わないと、北の方が怒りますから」
「いつも北の方は怒っているのだから、いいじゃないか」
道頼はそう言うと、明かりを消した。
「まあ、困ります。まだ片付けていないのに」
「大丈夫。ここに掛けておけばいい。さあ寝ましょう」
北の方は、自分の部屋に戻ったが、おちくぼ姫とあの男のことを考えると寝られない。



――あんなに立派な男がおちくぼの夫？　許せない！　そうだ、忠頼さまに嘘をつこう。おちくぼの部屋に、帯刀が通っていると言おう。そして、おちくぼを、どこかに閉じ込めてしまおう。でも、それだけではだめだ。あ、そうだ！　典薬助と結婚させよう！――

典薬助は北の方の叔父で貧乏な医者だ。六十歳を過ぎているのに、若い女が大好きだ。けれど、女はみんな典薬助のことを嫌っている。

## 七

朝になるとすぐに、北の方は、夫の忠頼に、帯刀がおちくぼ姫の部屋に通っていると嘘をついた。それを聞いた忠頼は、大変怒った。

「そんな娘は、もう私の娘ではない。物置き小屋に閉じ込めなさい！」

北の方は喜んでおちくぼ姫の部屋に行った。

「あなたは、本当に恥ずかしいことをしましたね。この部屋から出ていきなさい」

嫌がる姫を、北の方は無理に連れていこうとする。
阿漕は驚いて、北の方に言った。
「どうしたのですか。姫さまは何も悪いことをしていません」
北の方は、
「うるさい！　お前も、ここから出ていきなさい」
と言うと、鬼のように恐ろしい顔をして、すごい力で姫を物置き小屋に連れていった。物置き小屋には、酢、酒、魚などがたくさん置いてあり、とても臭い。北の方は、そこにおちくぼ姫を閉じ込めて行ってしまった。
おちくぼ姫は、どうしてこんなことになったのかわからない。悲しくなって、ずっと泣いていた。
夜になって道頼が来た。阿漕からおちくぼ姫のことを聞いた道頼は、



——私のせいだ——

と悲しく思い、阿漕に言った。

「姫を必ずここから連れ出すので、待っているように伝えてください」

道頼から手紙が届いたが、物置き小屋には鍵が掛かっていて入れない。阿漕が困っていると、北の方が、おちくぼ姫に縫わせる物を持ってきた。北の方は鍵を開けて小屋に入っていった。阿漕は、近くにいた北の方の三番目の息子、三郎に頼んだ。三郎はおちくぼ姫に琴を習っていて、やさしい姫が大好きだった。

「お願いです。これを姫に渡してください。北の方に気づかれないようにね」

三郎は姫の着物の袖に手紙を入れて、出ていった。

誰もいなくなると、おちくぼ姫は道頼の手紙を着

物の袖から取り出した。すぐに返事を書こうとしたが、筆も墨もない。それで、そこにあった紙に針で字を書いた。道頼は、針で書かれた手紙を読んで、何とかして姫を助けようと思うのだった。

八

北の方から、おちくぼ姫と結婚するように言われた典薬助は、うれしくてたまらない。物置き小屋のまわりを行ったり来たりしている。阿漕が来ると、

「これからは、私のことを大事にしなさいよ」

と、にやにやしながら言うのだった。阿漕が、

「どうして、あなたのことを大事にするんですか」

と聞くと、典薬助は、

「おちくぼの夫になるからだよ」



と、得意そうに答えた。そして、どこかへ行ってしまった。

阿漕は外から、

「今夜、典薬助が来ますよ。気をつけてください」

と、姫に小さな声で言った。姫はそれを聞いて、とても気分が悪くなった。夜になって北の方と典薬助が来た。気分が悪くなって寝ている姫を見て、北の方が言った。

「おじさん、あなたは医者なのだから、治してあげなさい」

典薬助は、

「姫さま、私が治してあげますよ」

と言って、おちくぼ姫を抱いた。姫は、典薬助に抱かれて、もっと気分が悪くなった。

そのとき、姫を心配して、阿漕が様子を見に来た。物置き小屋の戸が開いていて、典薬助が姫を抱いているのが見える。姫は苦しそうにしている。阿漕は典薬助に頼んだ。

「どうか姫さまのために、温かい石を持ってきてください」

典薬助は大喜びで、

「簡単なことだ。持ってくるよ」
と言って、出ていった。しばらくして、典薬助が温かい石を持って帰ってきた。姫はお腹に石を抱いた。姫がよくなるのを待っているうちに、典薬助は寝てしまった。おちくぼ姫と阿漕は朝になるのをじっと待っていた。
やっと朝になって典薬助が帰っていくと、おちくぼ姫と阿漕は、手を取り合って喜んだ。

## 九

次の日、阿漕はいいことを思いついて姫に言った。
「私は、典薬助が来て鍵を開けても、外から戸が開かないようにしておきます。姫さまは中からも、絶対に開かないようにしておいてください」
おちくぼ姫は、大きな重い木の箱を戸の前に置いた。夜遅くなって、典薬助が来た。戸を開けようとするが開かない。典薬助は何回も戸を開けようとするが開かない。とても

寒いので、典薬助はだんだん体が冷たくなってきた。それに、お腹が痛くなってきた。そのうち、もっとひどくお腹が痛くなってきて、お腹からはゴロゴロ、お尻からはピチピチ音がしてきた。お尻からの音はだんだんひどくなって、

「わああ〜〜〜、もうダメだ〜〜〜、出てしまう！」

典薬助は、お尻を押さえながら、逃げるように帰っていった。そして、汚れた着物を洗っているうちに、疲れてそのまま寝てしまった。



## 十

次の日、忠頼の家族や侍女たちは、みんな祭りに出かけた。北の方は、物置き小屋の鍵をかけて出かけた。みんなが出かけると、阿漕から知らせをもらった帯刀が、道頼とその家来を連れて、おちくぼ姫を助けに来た。

阿漕は、道頼と帯刀を物置き小屋に連れてきたが、鍵が掛かっている。道頼と帯刀は、戸を壊してやっと中に入った。道頼は、急いでおちくぼ姫を抱いて車に乗った。阿漕は、典薬助の手紙をわざとよく見えるように置いて、部屋を出た。手紙には、

**私の大切な姫さま、今夜こそ私のものになってください。**

と、書いてあった。

愛する道頼に抱かれて幸せなおちくぼ姫を乗せた車は、道頼の家に向かった。

さて、忠頼たちが祭りから帰って来ると、物置き小屋の戸が壊されて、中には誰もいない。

——誰がこんなことをしたのだろう——

忠頼は不思議に思った。

家ではみんなが騒いでいる。北の方は、阿漕が残しておいた典薬助の手紙を見つけ、おちくぼ姫とまだ結婚していないことを知って、典薬助を叱った。

「おちくぼと結婚できなかったのですね。ここにあなたの手紙があるのでわかります！だめな人ですね」

典薬助は答えた。

「あなたに言われて、喜んでおちくぼのところへ行ったのですよ。でも、一日目の夜は、阿漕がずっとそばにいて、おちくぼに近づくことさえできませんでした。次の夜は、いくら物置き小屋の戸を開けようとしても、全然開きませんでした。夜中まで外で待っていたら、寒くて体が冷たくなって、お腹が痛くなりました。そのうちに、お腹がゴロゴロ鳴りだして、とうとう着物を汚してしまったのです。汚れた着物を洗っているうちに、疲れて寝てしまいました。私が悪いのではありません」

典薬助は、一生懸命自分は悪くないと言う。それを聞いて、北の方は笑ってしまった。そばで聞いていた人たちも、みんな大笑いした。



「もう、いい。本当にだめな人ね。誰か他の人にお願いすればよかった」と北の方が言うと、典薬助は怒って出ていってしまった。またまた、みんなは、お腹が痛くなるほど笑った。

道頼の家では、おちくぼ姫も阿漕も幸せに暮らした。おちくぼ姫は五人の子どもの母になった。北の方にいじめられて泣いていたおちくぼ姫は、道頼の母親にも愛され、死ぬまで道頼を愛し続けた。もちろん、道頼も死ぬまでおちくぼ姫一人を愛し続けた。

[監修者紹介]

NPO 多言語多読（エヌピーオー　たげんごたどく）

2002年に日本語教師有志が「日本語多読研究会」を設立し、日本語学習者のための多読用読みものの作成を開始した。2012年「NPO 多言語多読」と名称を変更し、日本語だけでなく、英語、韓国語など、外国語を身につけたい人や、それを指導する人たちに「多読」を提案し、支援を続けている。http://tadoku.org/

主な監修書：『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんご　よむよむ文庫』レベル 0、1、2、3、それぞれ vol. 1 ～ 3、レベル 4　vol. 1 ～ 2、『日本語教師のための多読授業入門』（ともにアスク出版）

＊ この本を朗読した音声は、NPO 多言語多読のウェブサイトからダウンロードできます。http://tadoku.org/learners/book_ja/mp3downloads

〈にほんご多読(たどく)ブックス〉vol. 4-5
おちくぼ物語(ものがたり)
© NPO Tadoku Supporters, 2015　NDC817／34p／21cm

電子書籍版――2015年12月1日

監修者――NPO 多言語多読(たげんごたどく)
発行者――鈴木一行
発行所――株式会社 大修館書店
〒113-8541　東京都文京区湯島2-1-1
電話　03-3868-2651（販売部）　03-3868-2290（編集部）
振替　00190-7-40504
[出版情報]　http://www.taishukan.co.jp

表紙組版――明昌堂
制作所――壮光舎印刷




この本を朗読した音声は、NPO多言語多読のウェブサイトから
ダウンロードできます。

▶ **http://tadoku.org/learners/book_ja/mp3downloads**

---

## 〈にほんご多読ブックス〉 レベル/語数/文法のめやす

| | | JLPT | 語数 | 1話あたりの字数 | 主な文法事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 入門 | N5 | 350 | ～400 | 現在形，過去形，疑問詞，～たい　など（基本的に「です・ます体」） |
| 1 | 初級前半 | | 350 | 400～1,500 | |
| 2 | 初級後半 | N4 | 500 | 1,500～3,000 | 辞書形，て形，ない形，た形，連体修飾，～と（条件），～から（理由），～なる，～のだ，など |
| 3 | 初中級 | N3 | 800 | 2,500～6,000 | 可能形，命令形，受身形，意向形，～とき，から，たら・ば・なら，～そう（様態），～よう（推量・比喩），複合動詞　など |
| 4 | 中級 | | 1,300 | 5,000～15,000 | 使役形，使役受身形，～そう（伝聞），～らしい，～はず，～もの，～ようにする／なる，ことにする／なる　など |
| 5 | 中上級 | N2 | 2,000 | 8,000～25,000 | 機能語・複合語・慣用表現・敬語など 例）～につれて，～わけにはいかない，切り開く／召し上がる，伺う |

**JLPT**

日本語能力試験（JLPT）のレベルについては、「日本語能力試験公式ウェブサイト」の「N1～N5：認定の目安」（http://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html）を参考にしました。

**ふりがな（ルビ）のふり方**

レベル0～2…すべての漢字とカタカナ／レベル3，4…すべての漢字／
レベル5…小学校三年生以上で習う漢字



本書は、2014～2015年に発行された「にほんご多読ブックス」シリーズ（NPO多言語多読　監修・発行）の複製（リプリント）版です。

# おちくぼ物語(ものがたり)

継母(ままはは)からいじめられている少女(しょうじょ)「おちくぼ」の前(まえ)に、ある日(ひ)、美(うつく)しい若者(わかもの)が現(あらわ)れて二人(ふたり)は愛(あい)し合(あ)うようになります。平安時代(へいあんじだい)に書(か)かれた恋物語(こいものがたり)。

---

## *Tales of Ochikubo*

Ochikubo is a cute little princess whose mother-in-law bullies her constantly.  One day, a handsome young man appears before her and they fall in love...   A romance from the Heian era.





| | | |
|---|---|---|
| 0 | 入門 | Starter |
| 1 | 初級前半 | Beginner |
| 2 | 初級後半 | Elementary |
| 3 | 初中級 | Pre-Intermediate |
| **4** | **中級** | **Intermediate** |
| 5 | 中上級 | Pre-Advanced |

vol. 4-5